HOPE Bourgogne

ブルゴーニュ小史（2）

文芸評論家
饗庭　孝男
あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽の友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市―ヨーロッパ文化の象徴的空間―』（新潮社）『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

さてブルグンド族の王、ゴンドボーはラングルからマルセイユ、またロワールからアルプスまでを支配した。そして土地所有者たちと広大なガロ＝ロマンの平野を分ちもち、開墾をし、文化を築いたが、現在、古い墓地から発見される遺品から推察して、その移住とともに持ちきたったものが、装飾留金、帯留等、牧畜民族の技術が生んだ諸々の品物であったことが分る。それは、シャルネ・レ・マコン地方にとくに多く見出されるものである。

彼らの宗教はキリスト教だったが、しかし異端とされた「アウリス派」に属していた。（三位一体において父と子は二つの明別された本性をもっており、したがってキリストは人間でもなく、神でもないのである）。ところがフランク族のなかで頭角をあらわしてきたクロヴィスは妻、クロチルドがカトリックのこともあり、政策上も異教からカトリックに改宗することによって、地方に着々と土地をもち、教区を定めつつあった司教たちの支持をとりつけることができた。彼が後に「アウリス派」のブルグンド族を倒すのみならず、フランク族を統一する要因の一つにこの改宗の問題があったことを考える必要があろう。ゴンドボーは516年に亡くなった。

とはいえ彼が生きていた頃のブルゴーニュ地方には多くの異なる民族が住んでいた。彼がオルレアンに入城した時は、民衆がラテン人、ユダヤ人、シリア人の言葉で聖歌をうたったという。前回でふれたようにそれはキリスト教の布教が、オータンやソーリユにあったシリアやアジアの商人たちの居住区からはじまったこととも無縁ではない。それほどまで、ブルゴーニュ地方は東方との貿易が盛んであったのである。トゥールにも、ブルージュにも東方人のコロニー（植民地）があった。

ところでクロヴィスの二人の息子、チルドベールとクロテール、それに甥のティベールは、534年、オータンを攻略、ブルゴーニュ地方を中心とするフランスの支配を成し遂げる。ここにメロヴィンガ王朝が成立するのである。この王朝は300年間、ヴァロワ王朝よりも長くフランスに君臨した。が、しかしその統治は陰謀と虐殺、性的な乱行のあけくれであった。クロテールは六度正妻をとりかえたが、他の愛人は数え切れなかった。しかも亡くなった三人の兄の未亡人を順々に妻とした。彼の死後、四人の子はアウストラジア（東北部）、ネウストリア（中西部）、アクイタニカ（南部）、ブルグンド（東部）をそれぞれ統治したが、ネウストリアの王、ヒルベリヒは好色であり、王妃の侍女、フレデグンデを愛するが、彼が王妃と離婚したあと、兄のアウストラジア王、ジギベルト王妃の妹と結婚すると、フレデグンデは、その新妻を殺させ、自らがヒルベリヒの正妻となる。

他方、妹を殺されたジギベルトの王妃、ブルンヒルデはフレデグンデの放った刺客で殺されたジギベルトの遺児を擁して政治を行い、多くの敵を殺した。

ついにアウストラジア、ブルグンド、ネウストリアの豪族たちがクロテール二世を擁してブルンヒルデを捕え、三日間の拷問の末に、悍馬の尾につなぎ、引きまわした末に殺した。死体は四散したという。

とはいえ彼女はオータンに住み、多くの教会を設立し、エポワースに広大な別荘をつくった。さらに道路をひらき、そのなかの数本は今も「ブルンヒルデの道」という名で呼ばれている。死後、彼女はオータンのサン・マルタン修道院教会に葬られた。これ以後、王国の首都はソワッソンかパリとなり、しかも抗争にあけくれる王国の実権は、宮廷の最高の役人である宮宰（メール・デュ・パレ）が貴族に昇格してこれを握るようになった。彼らは全ての役人、公、伯、伝旨官、荘園管理人、司教までも任命するほどの力を得る。この従属関係と、ローマ時代からの官僚組織の利用が、たとえばメロヴィンガ朝につづく新しい王家、即ち宮宰出身のカロリンガ家の出発を形づくったのである。

このことと同時に、これら宮宰が所有していた広大な荘園の手入れや拡大、さらには5世紀から7世紀にかけての司教区の拡大と小教区の創設とその進行が、ローマ時代からガロ＝ロマン時代にかけての郡市中心主義を変えて行ったのである。ヌヴェール、シャロン・シュール・ソーヌ、マコンの司教区とそのまわりの小教区、加えて670年頃から根づき出したベネディクト会の修道院の拡大も意味をもった。たとえばムティ・サン・ジャン修道院は、もとディジョンの一人の隠士（エルミット）の創立にかかわっている。またベーズ修道院はアテュイエ伯であったアモジエの手によるものであった。都市のまわりにも次第に修道院がふえはじめ、オータンの近くにサン・マルタン、オーセールの傍にはサント・コムとサン・ダミアンがあらわれる。後者からは、やがてアイルランド布教の父となる聖パトリックが出る。ヌヴェールの近くにはサン・エチエンヌとサン・ヴァンサン、そしてディジョンの古代都市（カステルム）のはずれにサン・ベニーニュ修道院が生れるのである。キリスト教化は一段とブルゴーニュ地方を中心として広がりを見せていた。

（続）

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは（株）佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL：03－5762－3010　担当：岩沢、田中